

Title	「一本の線にも味わいと個性がある」
Author(s)	大原, 雄寛
Citation	デザイン理論. 2005, 46, p. 200-201
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52918
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

易なものとし、自分の意図だけを反映した「清潔な表現」、新しい表現が次々と生まれた。が、今日、デジタル成熟期に入り、既にそこには新鮮さはない。デジタル慣れした我々にとって、その多くは新鮮さとは縁遠い「デジタル臭さ」を感じるばかりである。厳密に1ピクセルに至るまで意図しないものを排除した「清潔な表現」が「デジタル臭さ」の由縁である。また、自由な発想を放棄しパリエーションの範疇からのセレクションを、創造と呼び違えているケースも散見される。

元来、人は人らしさを本能的に求めているように思われる。ハンドドローイングがもたらす「ニュアンス」は、「人らしさ」を醸し出す。人はそのニュアンスの中に深みや心地

よさを見いだす。計算ずくのデジタルが最も苦手とする偶然要素が、そのニュアンスを生んでいるのである。ハンドドローイング回帰は、昨今社会的にも注目される人間回帰の潮流に合致した自然な流れと考えられる。

とは言え、デジタルの便利さやデジタルにしか出来ないビジュアル処理を捨て、全てを懐古的にアナログ時代に戻すことは出来ない。双方の持ち味を生かし、使い分け、融合させて作品にとって一番大切にすべき「ニュアンス」を盛り込んでゆきたい。つまり、ハンドシンキングしながらハンドドローイングし、デジタルで処理することで、より進化した表現方法を得ることが出来るのである。

「一本の線にも味わいと個性がある」

大原雄寛／成安造形大学

1993年、開学と同時にコンピュータを使った造形教育を取り入れた。シンボルマークやイラストレーション、ポスターなど、可能な限りの課題をさせてみた。何しろ珍しい作業なので喜んで挑戦する学生も多かった。しかしフロッピーディスクに保存できるデータの取り扱いが精一杯で不十分な表現のまま我慢しなければならなかった。

そのころ一本の線すらまっすぐに引けない学生がいて、それがパソコンにえらく熱心で、きちっとした作業ができる事を非常に喜んでいた。しかしその学生は3年になった時、僕はこれから一年間パソコンはさわらないと宣言した。何か考える事があったのだ。また最

近、ある女子学生が言った、パソコンに向かっている時私の顔の表情が無くなっている、と言う言葉が非常に気にかかった。もちろんパソコンのとりこになっている学生も多いのだが。

パソコンは今後ますます必要とされる道具である。しかし表現者を育てる場から考えると、人物クロッキーにおける線は作者が何を観察し何を表現しようとしているのか、とても大切な線である。描画材料を選び、用紙を選び、美しい器物や風景を発見するこのような表現行為こそもっと重視されなければならないと、近年つくづく感じている。

